

人間にとって宗教とは — 北東アフリカからの問いかけ

第2部 エチオピアの宗教：絶え間なき再生

不可視界を介した異教共存・融合

—二つの精霊憑依の実例—

石原美奈子

南山大学の石原と申します。先ほどの宮脇さんのような素晴らしい象徴的な世界を開示することはできませんが、ここで私はエチオピアで遭遇した大変不思議な出来事を三つ語らせていただきたいと思います。

ロアルファキー・アフマド・ウマルとその後継者たち

私は、1992年以來、20世紀前半に活躍したティジャーニーヤというイスラーム神秘主義教団の導師であるアルファキー・アフマド・ウマルという人物の人生史および彼を聖者と崇める人々の活動を追って調査をしてまいりました。彼は1953年に亡くなりましたが、癒しに重きを置いた治療師として記憶されています。イスラーム、ティジャーニーヤを広める宗教指導者だったのですが、一般の人々に対しては病氣治しを広く行っていました。彼はムスリムなのですが、キリスト教徒も治療するということが知られていて、キリスト教徒のクライアントがたくさんいたということが、彼の特徴としてよく語られます。

アフマド・ウマルはオロミア州西部、ウォツレガ地方の西、スーダンとの国境あたりに住むマチャ・オロモの人々の間で宗教活動をしていました。そして、彼が亡くなった後に、霊媒師が雨後の筍のように出現し始めました。これらの霊媒師は先ほどの宮脇さんのお話にもあったように、ほとんどが女性です。私が調べたなかでは、男性は2人ほどで女性が10数人という具合に、大半が女性でした。

これらの女性霊媒師に憑くのがムスリムの男性

の精霊で、シャイフ・何某という形で尊称を伴って呼ばれます。シャイフというのはムスリムの宗教指導者の尊称です。ムスリムの精霊ではジンという言葉が一般的だと思いますが、この精霊たちは違っていて、ルーハーニーヤと呼ばれます。憑依されて霊媒師になるのはキリスト教徒から改宗したムスリムに多く、彼らは、アフマド・ウマル亡き後に、彼が行っていた人々に対する癒し行為を引き継いで行っているというわけです。

アフマド・ウマルがよく使っていたとされる精霊（ルーハーニーヤ）が一人おりまして、その名前をシャイフ・イドリースといいました。アフマド・ウマルは、伝説によりますと、柱に向かって「イドリース！」と呼んで、何々を持って来いとか、このことはどう思うかとか、精霊イドリースに命じたり、相談したりしていたというようなことがよく語られています。

精霊シャイフ・イドリースは、アフマド・ウマル亡き後、女性Sに憑依するようになりました。お腹から声が出るという形で憑依をされます。彼女も1996年に亡くなって、その後、シャイフ・イドリースはどこにも憑かなくなったのですが、2005年に私が訪問したときには、すでに二つの精霊を持っている女性Zの、その隣から時々シャイフ・イドリースの声がするようになったというわけです。

これら霊媒師のクライアントは、アルファキー・アフマド・ウマル同様、キリスト教徒とムスリム両方いまして、大半がオロモですが、老若男女、いろいろな人がいます。2005年に再調査に赴いた折りに私はこうした霊媒師が増えていること

に気がつきました。霊媒師が増えていると実感したのは、ある聖者廟のマウリド祭のときで、同じようにシャイフ・何某と名のつく精霊に憑依された女性たちが、一堂に会したんですね。霊媒師が一カ所に集まる機会が設けられるのは新しい現象で、10年前にはなかったのですが、そのときに人数を数えてみるとざっと15人はおりました。10年前には5人しかいなかったのが10年間で10人増えたことになります。

□オロモ社会における霊媒師

オロモ社会において、霊媒師の存在は珍しい存在ではないんですが、それほど古い現象でもないとされています。クヌットソン (Knutsson) という人類学者の、ウォッレガ地方東部での調査をもとにした報告では、19世紀にアヤナ (先ほどの宮脇さんのお話にもありました) に憑依された霊媒師 (カッル) が出現し、19世紀末以降に広まったと言われています。ウォッレガ地方東部では、霊媒師は主に男性で、憑依儀礼はダツラガと呼ばれています。主に憑依するのは女性の精霊マラム (Maram: これはキリスト教のあのマリアのこのようです) と男性の精霊ジャビール (Jabir) ですが、この精霊マラムと精霊ジャビールを頂点とする精霊の階梯制のようなものがあって、霊媒師はこの階梯に従って癒しの行為を行ったり、相談事に応じたりしています。

この精霊たちと対照的なのは、悪さをする精霊ザール (zar) です。悪さをする反社会的なザールというのは、中東一帯でも女性に憑依する精霊として知られています。

□キリスト教徒とムスリムの精霊の混在

次に、私がたまたま参加した、とても不思議な体験を紹介したいと思います。私はこの時23歳でしたが、初めてエチオピアに足を踏み入れて、初めて見たキリスト教の儀礼だったのですが、それがとても不思議な体験となりました。

アジスアベバから少し南にズックワラという山がありまして、これは聖なる山とされているのですが、その山の頂上に、キリスト教の聖人アッボ (Abbo: 正式名称ガブラ・マンファス・クドゥス [Gabra Manfas Qiddus]) にちなんだ教会があります。昼間にここでアッボの祭りが行われます。ズックワラ

は休火山で、山の頂上にカルデラ湖があって、とても綺麗な所です。湖を挟んで教会の対岸に森があります。夜になると、人々は森の方に行きます。その森でダツラガ儀礼なるものが行われていると聞いて、私たちも行ってみました。

森のなかにはいくつもの集会の輪 (参加者たちはジャマア: jema'a [アラビア語で集会の意味] と言っていました) ができていて、その輪のなかで、歌ったり踊ったりしながら、憑依の儀式が行われる、といったとても不思議な空間が繰り広げられていました。憑依されてからの言葉や歌を聞くと、アッラー・アクバル (アッラーは偉大なり) というアラビア語の言葉や、エチオピア南東部で一番有名なムスリム聖者と言えるシェイフ・ヌール・フセイン (13世紀の聖者) の名前が聞こえてきました。なかにはウンマベート・モーミナ (Immabet Momina: 1920年代に亡くなった有名な女性のムスリム聖者) に呼びかける声も聞こえました。

2005年9月、私はまた不思議な体験をしました。前述のように、私はアルファキー・アフマド・ウマルに忠誠を誓う精霊に憑依された霊媒師を何人も見てきましたが、精霊は全てムスリムで、霊媒師もやはりムスリムでした。ところが、このときは、精霊はムスリムでしたが霊媒師はキリスト教徒のままだったのです。彼は、エチオピア東部のムスリムの有名な古都ハラルの郊外に住んでいるキリスト教徒のM氏、70歳の男性です。霊媒師としてすでに45年の経歴をもっていて、イギリス、アメリカでも治療活動を行っている結構有名な人物です。彼の自宅で行われていた集会に行ってきました。

先に述べた著名なムスリムの聖者ウンマベート・モーミナは、改宗前はシベシ・イマル (Shibesh Imar) というアムハラの名前でした。エチオピア北東部に位置するウォロのアムハラ出身で、キリスト教徒からムスリムへの改宗者です。墓はアルシ地方のファラカサにあります。その墓を彼女の孫のヌール・アフマドが守っていました。ヌール・アフマドもムスリムの名前ですが、彼もやはり元はキリスト教徒で、改宗以前はケンニヤズマツチという称号をもつタイエという名前でした。キリスト教徒のアムハラの名前です。ヌール・アフマドはデルグの時代に処刑されています。デルグというのは1974年から91年まで続いたメンギスツ

政権の時代をさします。

M氏は、この方の友人でした。ヌール・アフマドの祖母モーミナは聖者ですが、ムスリムの精霊を使っていた霊媒師であったとも言われています。そして彼女に憑依していた精霊Aが、このM氏に憑依するようになったというわけです。

モーミナが亡くなった後に、孫のヌール・アフマドがM氏と親しくなっていて、お祭りのときなどはM氏に憑依した精霊Aによる治療などの活動を一緒にしていました。M氏には、その他にムスリムとキリスト教徒の精霊が憑いています。

エチオピア暦の正月に当たる9月11日の前には、13番目の月にあたるバグメ月というものがあります。この月は5日間(閏年は6日間)ありますが、その3日目から5日目にかけてハドラが行われるというので訪ねていきました。ハドラとは、イスラームの神秘主義教団で行われる神との合一を図る儀礼の集会です。エチオピアでは祈祷集会を指します。ムスリムの言葉です。

ハドラは夜の9時から翌朝の4時頃まで3日間行われました。参列者は清浄な体でなくてははいけません。何をもって清浄かという、血の臭いがしてはいけません。女性の場合は月経中は参加できないし、葬式帰りの人もだめです。前の晩に性交を行って、体を清めていない人も参加してはいけません。そういった制限があります。服装はみんなムスリム風です。キリスト教徒もムスリムもみんなムスリム風の格好をします。人々は、マンズマ(宗教詩歌)という、ムスリムのアラビア語の混じった歌を歌いながら、霊媒師に精霊が降りてくるのを待ちます。

願掛けのために供物を持って来る人たちがいたり、自分の奇跡の体験(qissa)を語る人がいたりします。私にとって少し衝撃だったのは、霊媒師が座る段の背後の壁にイエス・キリストの像と、メッカのカーバ神殿の描かれた絨毯が並んで飾られていたことです。

憑依は、真っ暗な闇の中で始まりました。1日目は精霊A、2日目は精霊B、3日目は精霊Cというように憑依します。キリスト教徒の精霊Cがやってくる最後の日は、ハドラの場合の入場の仕方も、蠟燭を持って、キリスト教の歌を歌いながら入っていくといった形で、キリスト教の儀式的雰囲気を出しますが、やっぱりハドラの場合はムス

リム的な雰囲気です。

ハドラでは参列者は、チャット(*Catha edulis*)を噛みながら、座っています。その間、コーヒーの儀式があります。これらはムスリムのハドラでは欠かせないものです。そして、精霊が憑依している霊媒師に、参列者が相談事を持ってくることもあれば、その合間を縫って海外からも電話で相談がきます。参列者は、自分の病の苦しみ、あるいは貴重品が喪失してしまった、大事な人がいなくなってしまった、あるいは生活苦などを訴えます。それに対して憑依した精霊は、異様な音を出しながら思索に没入します。そして、訴えた者の背景、病や苦難の「原因」を提示します。その背景や「原因」がいかにも当たっているように見えます。一言も口に出して言っていないのに、自分の背景のことを言われて、訴えた者はすごくびっくりします。精霊はさらに、訴えた者の行動のどこに病苦の「原因」があったかをつきとめ、そのことを厳しく指摘します。しかし責めるだけではなく、あとできちんとフォローして、ここのところを治せば、あるいはこうすれば事態が改善する、といった具合に解決法を提示します。

霊媒師M氏はキリスト教徒ですが、ムスリムの精霊が憑依します。2日間はチャット、マンズマ、コーヒーなど全てハドラの儀礼的な装置を使います。そして3日目のみがキリスト教徒の精霊がやってくる日で、その日は一部キリスト教的なところもあります。

しかしハドラにも、ひじょうに流動的な側面があります。ハドラの参列者にはムスリムもいればキリスト教徒もいますが、全てがムスリムの格好をします。民族的にもいろいろな人がいます。ソマリがいればオロモもいる。ハラルもいればアムハラもいる。通訳もいます。

こういう異教共存・融合のあり方に反対する考え方、運動というのでもエチオピアには広く存在します。イスラームでは聖者崇拜や聖者廟参詣、霊媒師に批判的なワハビーヤという、復興主義的な思想を持つ人々がいまして、キリスト教の世界でも、聖人崇拜あるいは呪術師(T'onkway)に対して批判的な福音主義諸派があります。こういった立場の人たちは、先ほどのM氏の活動などはT'onkwayだと批判するわけです。私の友だちにも福音主義派がいて、M氏のことを話したら、彼女

があるドラマの DVD を見つけてきて、これを見なさいと私を諭すのです。それは、“Amlakinna Amalikt”(“God and gods”の意)という題名のドラマで、ウンマベート・モーミナの名前を呼ぶ似非霊媒師、先ほどのM氏になぜかとても似ているこの似非霊媒師に騙されて生活を滅茶苦茶にされた夫婦が、福音主義派の説教師に救われるという内容でした。

精霊憑依に関しては、三つの立場があると思います。一つは、絶対に否定する立場です。イスラームの世界ではワハビーヤ、キリスト教では福音主義派の人たちで、教条主義的な宗教のあり方を追求する立場だといえます。二つ目は、何でも受け入れる立場で、呪術師も霊媒師も同等のものとして、個人的な利益優先の宗教のあり方を追求するという立場です。そういった人々は、悪魔でも精霊でも何でもいいという考えで、道徳的な側面を否定するという立場ではないかと思えます。三つ目は、その中間的とも言えると思えますが、一部肯定の立場です。精霊にも人間にも善悪があるという立場で、したがって選択的に利用すべきであるという考えです。その場合、憑依される人物が神を畏れるかどうかということがメルクマールとされます。これは人間中心的な宗教のあり方を追求する立場であると思われま

□異教共存・融合が示すもの

こういう異教共存・融合を考えると、一体宗教とはこの人達にとってどういう意味があるのかということになりますが、非常に当たり前のことかもしれないませんが、宗教には道徳的な羅針盤と癒しという二つの側面があると思えます。

北東アフリカ全体に、政治経済的な動乱、社会不安、そして最近の新たな動きとして近代化、民主化といった動きがあります。そのなかで、個人が強い立場にあるものとして、社会のなかで浮かび上がってきました。しかしその反面、個人はいまだ脆弱なわけです。脆弱であると同時に強力であるといふ二面的な側面を持つ個人が近年立ち上がってきた。そういったなかで、さまざまな開かれた選択肢が出てきたわけです。その選択可能性のなかで、宗教は道徳的な羅針盤の役割を果しているわけです。

エチオピアで私が体験した宗教のさまざまな場面において顕著であると思われるのが、不可視の

精霊に訴える祈祷集會が重要視されているという側面です。そこには、同胞愛が確認されます。いがみ合っている者は祈祷集會に出席してはいけないとされていて、祈祷集會ではお互いに同胞愛で結ばれている人々が、そこでまたお互いの同胞愛を確認する。そして、過失があればその過失も認めあいます。過失を認めて、さらにそれを償う猶予を与える。そういう温かい感じがします。私などは祈祷集會に参加すると涙が出てくるのですが、それは過失にも猶予を与えて健全な日常生活を回復する機会を与えあっている光景を目の前にするからです。回復の方法も提示されます。

ここで顕著なのは、異なる宗教が共存し融合するといった状態を許容する人々の論理です。今後の課題ではありますが、ここにはさまざまな歴史的な背景があるといえます。特にウォッロ地方では、19世紀の後半に、ムスリムが政治的にキリスト教に強制改宗させられたという歴史的な出来事があり、改宗が頻繁に行われます。しかしオロモはイスラームやキリスト教を受け入れましたが、オロモ的な宗教習慣を保持しているという見方もあります。このようにさまざまな人々の論理と独特な歴史的背景があつてこそ、異教共存・融合が許容されるのではないのでしょうか。

□不可視界がもたらす異教の共存・融合

最後になりますが、不可視界を介した異教の共存・融合ということで、不可視界がどういった性格のものであるかということを考えてみたいと思えます。それはつまり、異教、異なる宗教でも相互に浸透可能であつて、越境可能であり、そういう世界が不可視界なのではないのでしょうか。先ほども見ましたようにズックワラでは夜、憑依儀礼が行われていました。M氏の憑依も暗闇のなかで行われていました。夜、暗闇、不可視界といった場が、どうも私にとっては、異教間の相互浸透、越境を可能にするような物理的な環境なのではないかと思えてなりません。これらは言うてみるならば、昼間、明るみ、可視界での人々の日常的な活力を回復するための通過儀礼のようなものとして、非常に重要なのではないのでしょうか。

アルファキー・アフマド・ウマルは、西アフリカ出身のティジャーニーの導師ですが、彼が1940年代に皇帝ハイレセラシエ一世に呼ばれた時のこ

とが口頭伝承に残されています。私は初めてこれを聞いた時にはよく理解出来なかったのですが、今にして思えばこういうことだったのか、という風にも思い返します。つまり彼はこういうことを皇帝に言ったそうです。「私は夜の世界、あなたは昼の世界」、互いの領分で、仲良くやっていきましょうというようなことです。夜と言いますとやはり不可視の世界、そして昼は可視の世界。また夜は、異教が共存しあう癒しの空間である。夜によって昼間にはみんな日常的に普通の顔をして生活

が出来ると言えるかと思います。

エチオピアと言いますと、やはりどうしてもキリスト教が優勢の国家です。社会主義の時代においても、二つの宗教は平等だと言われましたが、結局はキリスト教優勢の国家だと言わざるを得ません。このキリスト教優勢の国家におけるイスラームの位置づけを「私は夜の世界、あなたは昼の世界」という言葉がうまく表現しているのではないかと思います。

(いしはら・みなこ／南山大学)